

司馬遼太郎

義経

上





文春文庫

義 経 (上)

定価はカバーに
表示してあります

1977年10月25日 第1刷

1994年9月25日 第34刷

著 者 司馬遼太郎

発行者 堤 堯

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710526-8

文 春 文 庫

義 經

(上)

司 馬 遼 太 郎



文 藝 春 秋

義

經

上

初出誌 「オール讀物」昭和四十一年二月号～四十三年四月号

原題は「九郎判官義経」

寝腐れの殿

一

都には、貴族の栄華がある。

この物語は、そういう古い世のことだ。しかし人間の歎くこと笑うことは、いまもむかしもかわらない。

都の一条坊門のあたりといえは、辻に樗の樹がある。市人はみな知っている。

その枝の張る南側に破れ築地があつて、そこに藤原長成という中年の公家が住んでいた。

「一条長成」

というのが通称である。

「寝腐れの殿」

というあだ名もあつた。どことなく様子が貧相でいつも寝起きの面のように冴えない、という意味であらう。

藤原という姓がついているが、末家のうまれで立身の見込みはまったくなく、四十を過ぎてや

つと大蔵卿おおくらきやうになった。大蔵省の長官ではあるが、これでは貴族的身分とはいえず、まずまずの宮廷官僚というところであった。

「もはやわしの一生も寝腐れよ」

というのが、口癖であった。寝腐れはてこれ以上の出世はのぞめない、という意味である。「となれば、この一期いちごを生きた証あかしに、よいおなごと添いたい。そのみが望みゆえ、たれぞよい女もを世話してくりやらぬか」

と人にも言い、神仏にも願ひ（阿呆なはなしだが）、もはや足摺あしずりするような氣持でひたすらに望みつづけていた。

こんな寝腐れにも、友人はある。

「指ノ法師」

というらしい男だ。

法師といつても寺と僧階をもった坊主ではなく、市井住いまちのまま法師拵ごしらえをし、毎日ひたすらに色ごとの話ばかりして日を送っている。

藤原氏の出で、安公家の長成とは従兄弟いとこどうしにあたる。同じ藤原氏でも値の安いほうの血統ちすけいの出だから、わかいころから官にもありつけず、五条あたりの遊女に養われたりして送っていたが、中年に近くなつてから、妹の遺領がころがりこんできた。

一族の者が、

「ただでは呉くれてやるまい。頭そを剃りこぼつて墨染すみぞめの一枚もまとい、かの者（妹）の供養でもするなら、相続をみとめてやろう」

ということで、法師姿にさせられてしまった。いわば、遺領坊主というやつだ。

長雨が降りつづいている日、この指ノ法師が他人の網代車あじろぐるまを借りて一条坊門の長成の屋敷をたずねてきたことから、この長い物語がはじまる。

「居るかや、居るかや」

と、法師は土門つちもんを掻かいくぐった。土門とは築地塀の途中を割りこぼって作った屋根なしの門のこと、法師が他家を訪問するばあい、どういうわけかこの門をくぐる。

「ほう、法師が」

長成はちょうど退屈していたところだからいそいで寢殿しんでんに招じ入れた。寢殿といっても底ひきしがおりとしの嵐でこわれたままになっているひどいやぶれやである。

二人は、円座を敷いて対座した。

（相変らず、貧相な顔だ）

どちらも、同時に思った。

法師も長成の寝腐れた性根や面つきつらを軽蔑しているが、長成も法師の世の渡りようを尊敬してはいない。そのくせたがいに自己嫌悪を感じるほどにうまがあうのである。

「きょうは用があつてきた」

「そりや珍めづかな」

「当家に福をもつてきたわ。福は福でも、土地ではない。いやさ土地も五穀がみのるが、この福も物がみのる」

「硬いものか、やわらかいものか」

「おうさ、柔らかいものよ」

「女か。――」

長成は哀れにも叫び声を出していた。

「その前に、酒を頂戴したいな」

法師はぬけめなくいった。

長成は、「おう、まことに。これは、~~そ、そ、~~をした」と童もよばず、自分で台所へ駆けこんで酒の支度をしたというから、よほど肝の躍る思いだったのであろう。

藤原長成の心情は、可憐といっている。

幸い、先年、妻をなくした。

これが、なにごとにもうだつのあがらぬ長成の半生のなかでは唯一の幸福だったろう。あらたに北ノ方を迎える希望ができたのである。

（わしにも、佳いおなごをもてる機会ができた）

とおもった。

なるほど男ぶりさえよければ、都のならいで幾十人でも女はできる。ところが、長成にかぎって若いころから靡いてくれた女というものがいない。

結局、屋敷の北ノ対屋に住まわせる、つまり正妻にする、という条件以外にこれはという女が来っこない。その北ノ対屋には二十年狐のような妻が住み古していたが、それが先年死んだ。

（わしの一生にもまだ光明があったか）

と、長成がなんととはなく浮き立ちはじめたのは、その頃からである。

酒器をもって座にもどり、

「さあ法師、きこう。どんな娘だ」

と勇みこんだ。

「生娘きむすめではない」

「ああよいとも。これはというほどの女には仇あだし男の四人や五人はいるものだ」

「じつは子供が四人いる」

「こりゃこりゃ」

長成はあきれた。法師は手で制し、

「待て待て。わしの話をきいてからものを言え。その女人にょにんの容色たるや、漢の李夫人、唐の楊貴妃もこれには過ぎじというほどのものぞ」

「法師、それほど女人がわが家の北ノ対屋に住んでくれるのか」

長成の顔つきがかわった。

「それほど女人ならば子供が何人あってもよいわ。わしが養育するぞ。して、誰たが家のむすめで、何という名だ」

「我御料わごりょう、名をきいて悶絶するな」

「これはこれは、関白かんぱくの出戻り娘でもあんなるや」

「関白どころか、無位無官の地下人じげじんの娘だ」

「よいとも。わしは家柄をいわぬ」

言わぬのが、道理である。貴族の家では美貌の娘がうまれるとそれをつるに栄達しようというのが普通だ。だから藤原長成くんだりの安公家にまで貴族出身の美貌の娘が舞いおりてくるわけがない。とにかく長成のもとに来る同族からの縁談はこれでも人かとおもわれる容貌の女ばかりなのである。

「とにかくわしは妻選びの方針めどをきめているのだ。藤原姓の落穂をひろうよりも、地下にうずも

れた玉を拾いたい」

「賢明だ」

法師は、深くうなずいた。この法師もすれっからしの下級貴族だから長成の方針がいかに得策かを知っている。美貌の地下女に子種を銜^{くは}ませて美貌の娘を生む。それが長じて藤原氏の宗家や権門の息子の目にとまれば父親の出世にも希望がもてるというわけだ。

「法師、まだ名はきいていない」

「聞いて悶絶するな」

「その文言^{もんごん}、さっきもきいた」

「常盤だ」

「と、ときわとは、かの常盤か」

「左様、かの常盤よ」

法師は、ぽんと石を投げこんで池の面^{おも}の波紋を楽しむような落着きようでうなずいた。

「そ、それは毒じゃ」

と長成は叫んだ。常盤御前ならば洛中洛外^{らくちゅうらくがい}随一の美女であることは、市井の物売り女^めでも知っている。しかし、

「毒」

という言葉が、偶然、長成の口をついて出た。そのとおりであろう。河豚^{ふぐ}の肉は美味であることは知られているが、その血に毒がある。食いたい^{たべたい}が命が惜しい、といわれる実感が、常盤御前という名にはある。

常盤は、関屋せきやという女の娘である。市塵しじんにまみれて暮らしている階級の者の子だから、父親まではわからない。

洛中の評判になったのは、十三のときである。

その年、九条院で美人選びがあった。

藤原伊通これみちという貴族が、その娘多子よしこ（九条院）を近衛天皇の中宮に納れ奉ることに成功した。そのよろこびもあって、多子の侍女として空前の美女を選びたいと思ったのである。

（あれは久安六年のころだったかな）

と、長成も記憶していた。

たかだか十年前のことだが、藤原貴族にとっては遠い栄華の夢のような気がする。なぜならばその後十年の間に平家・源氏といった武家がにわかに頭をもたげ、都で戦乱が相次ぎ、ついに平治ノ乱で源氏が没落し、平家が大きく興隆して、あろうことか宮廷に進出し、藤原氏をおさえ、宮廷の顯職けんしやくは平家の一門一族をもって占め、ついにはその一族で日本の六十余州の支配者になりおおせている。

（夢のようだ）

と長成が思うのは、藤原伊通がやってのけたあの美人選びのことである。藤原貴族最後の栄華を象徴する行事と言えはすまいか。

なにしろ、都の凡下ぼんげの娘どものうち美人を千人選んだのである。そのなかから百人をえらび、さらに十人にしぼり、そのうちの九人を斥けしりぞけ、たった一人を選抜した。それが、常盤であった。

（非常な人気だったな）

長成も十年前、この権門にお祝いに行つて庭さきでその常盤をみたことがある。わずか十三歳でしかない少女だったが、魚籃ぎょらん観音の再来ではあるまいかと息をのんだことであつた。

その常盤は、身分は九条院多子の雑仕女ざうしめでしかない。最下級の女官なのである。当時の藤原氏の権勢というのは、たかが姫君付の雑仕女をえらぶのに洛中を沸きあがらせるほどの人選びを興行することができた、というところにあるであらう。

（たれが常盤を手に入れるか）

ということも、諸大夫しよたいふ以下の下級官人たちのあいだで騒がれたようだった。

さすがに貴族の子弟は、わざと黙殺していたようだった。彼等は色好みではあつたが、めざすのは同じ貴族仲間の姫君たちで、雑仕女のもとには普通かま通わない。

「源義朝と出来ているらしい」

ということを長成がきいたのは、美女選びがあつてから二年後である。常盤は、十五歳であつた。（体がまだ熟していない）

当時、長成は生唾なまつばをのむ思いでそれをおもひ、かつ一面では冷笑した。やはり牛は牛連れか、と思つたのである。

武家は貴族ではない。

源氏・平家の棟梁とうりやうといつてもその官位も卑しく、藤原氏の目から見れば立つて歩く犬程度にしか思われていなかった。事実、彼等は犬のように藤原氏の権門に出入りし、その番犬の役目をはたしてきた。その見返りとして多少の官位をもらえれば狂喜した。

武家は、二流にわかれてゐる。

源氏と平家であった。その勢力地図もくつきりしている。源氏は東国に地盤をもって騎馬戦がつよく、平家は西国に地盤をもって、海戦と貿易に長じていた。

棟梁は、源氏は為義・義朝であり、平家は清盛であった。かれらは、親分といっている。

法律的に、つまり国家の制度上諸国の武士を統制しているのではなく、「武士の棟梁」といっても私的な存在なのである。諸国の武士は、いわば地主である。その地主どもの私的利益を、源氏・平家の棟梁たちは代表し、代弁し、擁護してやる、ということとで都に常駐し、藤原貴族の家に出入りし、地方の利益よかるべく周旋している。

そういう存在である。藤原貴族からみれば、源氏・平家の棟梁の頼みごとをきいてやるかわりに、自分が政争をおこすときの軍兵ぐんびようとして使う。

(牛は牛連れだ)

と長成がそのころ思ったのは、雑仕女の相手には源義朝程度が相応だ、という意味だった(むろん十年後のいま、保元・平治ノ乱を経て武家の価値が暴騰し、平家はついに天下をとるに至ったことを思うと、このころの実感は今昔の感がなきにしもあらずだが)。

とにもかくにも、源義朝が常盤のもとに通っていたころの武家はその程度だった。

ところがその時分でも、武家は軍事力だけでなく財力の面でも、公家一般よりはるかに豊かだった。

女の数が多い。

長成は、その点がうらやましかった。義朝の父の為義などは、子供を四十六人もつくった。そのなかで名も聞こえぬ者もあったが、長男の義朝、八男の為朝などは出色の子だったといえる。

義朝も、その漁色は父にゆずらない。かれが常盤のもとに通いはじめたのは齡としの三十を過ぎたばかりだったが、すでに男だけでも何人かの腹ちがいの子があった。

淀川沿いの橋本宿はしもとじゆくの遊女あそびめに生ませた悪源太あくげんた義平よしひら、修理大夫しゆりだふ範兼のりかねという下級官人の娘に生ませた朝長ともなが、さらには東国と京を往来する途中、熱田大宮司藤原季範すえのりの娘を愛し、そのあいだにできた頼朝よりともなどがある。

(武家はみな有徳者うとくしやよ)

と長成などはおもうのだ。有徳者というのは人柄がいいという意味ではなく、金持だという意味である。

義朝はよほど常盤を愛していたらしい。

常盤にだけは飽かずかよいつづけ、今若、乙若、牛若の三人の子を生ませた。

牛若が二つのとき、源氏の棟梁源義朝は三十八歳の若さで死んだ。

尋常な死に方ではない。世に「平治ノ乱」とよばれる天皇・上皇、公卿、源平を真二つに割つての争乱で平家に敗れ、都を脱出し、落武者になって尾張までたどりついてからもとの家人けいじんに殺された。それも風呂のなかであった。

(武家の世を渡ることのすさまじさよ)

と長成がおもったのは、尾張から送られてきた義朝の首が六条河原の獄門に梟かけられたときである。

すでに肉の剝はがれた腐はたれ首であったが、どうしたことか瞼まぶたが閉まらず、両眼はなお腐らずに天をにらみ、碁石をならべたような歯が、地を啖くわんばかりの勢いでしらじらと光っている。首になっても、恨みを地上に残すすさまじさは、公家の性根にはない。おなじ日本人でも、人種がち

がうほどであった。

(怖や)

と長成は思い、数日、その首の相をおもいだすたびに胴が慄え、めしものどに通らなかった。義朝が死に、源氏の武権が崩壊し、平家が都と諸国をおさえ、義朝の分類を捜しだしては刑殺しはじめたころ、

(常盤御前は、どうした)

という囁きが、都ではしきりと交された。

常盤には、源氏の御曹司というべき少年、幼童、嬰兒が、三人もいるのである。

むろん、彼女は源氏の壊滅を知った直後、都を逃げた。あとからわかったことだが、最初は雪の中を清水寺へ逃げた。平治二年の正月のことである。常盤は、八つの今若と六つの乙若の手をひき、去年うまれたばかりの牛若を抱いて夜陰、清水の坂をのぼり、参籠所にとどりつき、観音の宝前に灯明をにかけて終夜、三人の子の前途を祈った。

常盤は、美しい肉体をもっているほかさほどの教養もない。しかし普門品三十三巻と法華經三部は諳ずることはできた。それを夜の白むまで低誦しつづけた光景は、ながく都の人々の美しい口碑として残った。

そのあと清水山内のさる塔頭の僧にかくまわれたが、翌夜、寺を去り、京を脱け、途中山中をさまよいつつ大和に入り、宇陀郡竜門という里の伯父の家に隠れた。

「そういうことであつたな」

と、長成は指ノ法師に言い、自分の記憶をたしかめた。

「左様、よく覚えておられる。あとあと、常盤御前の都落ちの難渋を知って、都の者は袖をしぼ